

## 第6講 中間まとめ—多文化・多民族社会を捉えるための枠組

多民族国家、アメリカの建国の事情

文化的融合主義から文化的多元主義まで

### (1) 契約による社会 (the society by contact)

エリザベス朝イングランドで、国教会による統一を強化する政策がとられる。

(絶対主義的治世を貫徹するため)

これに対し、国教会の改革、墮落した社会をピューリファイ清浄化して、真のキリストの教えを回復しようという主張が、プロテスタント(新教徒)からなされる。

最も厳格なプロテスタントであるピューリタンは激しい弾圧を受け、地下運動的な傾向を強める。この流れから、分離派と呼ばれる一派が出現。聖徒(神の救いに選ばれたもの)と信ずるものとの間の礼拝が起る。コングリゲーション(congregation=聖徒の集団)と呼ばれる。

自由意思に基づく集団(voluntary association)は、ますます危険視され、弾圧を受ける。

彼らの一派(スクルービのピューリタン)がオランダのライデンに移住。

プロビデンス(Providence 神の摂理)に導かれるままに、pilgrim=巡礼の途につく決意を固める。

「宗教」と「国家」、「ピューリタニズム」と「デモクラシー」を、アメリカの土壌のなかで止揚。

### (2) 限りなき分離主義(infinite separatism)

分離派のプリマス植民地、非分離派のマサチューセッツ湾植民地、

それも窮屈と感じる移民によるコネチカット植民地など。

分離の傾向が、アメリカの特質を形成していった。

セパレティズム分離主義が、高次元への止揚のためのバネとなっている。

破壊のための分離、といよりもの、建設のための分離である。

民衆(デモス)にゆだねられた権力(クラトス) —これこそデモクラシーの語源である。

ノーブリス・オブリージュ(noblesse oblige)

例、イギリスの貴族(ノーブレス)であるペンは、アメリカという新天地で自らの自由への信条を貫き通し、その社会的責任(オブリージュ)を果たした。

(3) 分離の衝動: 不断に働き続ける。都市からの市民の分離、外交政策における十字軍的衝動、異質なものからの分離によって同質性を確保しようという傾向は、分離し得ない異質物に直面すると、これを抹殺する方向に働く。

こうした分離への衝動は、ある程度同質性が確保されている共同社会の内部においても、不断に働き続ける。その結果、共同社会の内部には、常に混沌と無秩序への傾向が見られる。アメリカ社会には、本質的にアナーキーの傾向が内在している。

17世紀のニューイングランドのピューリタニズム運動は、こうしたアメリカ人の一般的性格の原型を作り出したという点で、重要な意味をもっている。